【研究論文】

中国人留学生の友人ネットワーク

李　　文
LI Wen

1. 来日留学生の友人ネットワーク問題

2008 年に政府が「留学生 30 万人計画」を発表したように、日本の留学生受入れ政策でも、グローバルな「人材の獲得」が重要な課題として意識されはじめている（寺倉 2009）。その中で、日本における留学生の 6 割を占める中国人留学生が、今後も「30 万人計画」を実現するための主力になるだろう。しかし、その留学生の受け入れ態勢と、留学生側の期待との間には大きなギャップがある。

たとえば、鈴木洋子（2011 : 173）が 2006 年に実施した留学生調査によれば、「日本での就職を希望する第一の理由」として最も多かったのは「日本語が使えるから」の 44.5% で、最も少なかったのは「日本に知人友人がいるから」の 3% だった[1]。日本に来た留学生は、グローバル人材というよりも「日本語が使える人材」に育てられる一方、「無縁社会」ともいわれる現在の日本社会の中で、ほとんど人的ネットワークをつくれないまま、深刻な孤立状態の中におかれている。

日本側にとっても、留学生を通じたグローバルな人的ネットワークの形成は喫緊の課題であり、2004 年の中央教育審議会でも「諸外国との相互理解の増進と人的ネットワークの形成」「国際的視野をもった日本人学生の育成と開かれた活力社会の実現」など、新たな留学生政策の展開が論じられてきたが、現実はそうなっていない（鈴木 2011 : 17–18）。

日本学生支援機構の『平成 25 年度私費外国人留学生生活実態調査』の結果をみると、留学生が日本を留学先として選んだ理由として「日本社会に興味があり、日本で生活したかったため」（56.6%）が最も多かった。つまり異文化体験者として日本社会に溶け込み、日本の人たちとコミュニケーションをはかることが、留学生にとって第 1 の目的なのである。しかし、「留学後、日本人に対する印象が良くなった」とする回答は全体の 50.4% と、調査が始まって以来の最低値になっている[2]。

また、大橋敏子による調査（2008）においても、「日本人の友達をつくること」が留学生のメンタルヘルスと正の相関（0.74）を示している（大橋 2008 : 48）ものの、うまくいかない場合は最大の精神的ストレスになっている。また、日本にいる留学生の中では、欧米出身者より非欧米出身者のストレスのほうが高い傾向があり、日本人と親しく交際するうえで障害が大きいことがわかっている。今後、日本文化と関係づけた詳細な研究が望まれている（大橋 2008 : 52–56）。

日本の集団文化と関連して、阿部清司（2004 : 301–310）が指摘しているように、日本にくる外国人は日本人の付き合い方を無意識のうちに強要されがちで、それが原因でトラブルが多発している。特に「内なる国際化」[3]に対する反発の一つとして、アジア系外国人を軽視もしくは蔑視する傾向があるという。そういう状況のままでは、留学生がその人的ネットワークを通じてそれぞれの

母国に向けて日本についてポジティブな発信をすることは考えにくいのではないか。

もちろん、留学生側にも問題はある。とりわけ「第三世代」[4]の中国人留学生に関して注意するべき点は、彼らの SNS によるネットワーキングの習慣が、日本人学生のそれとは大きく異なることである。同じデジタル・ネイティブ世代ではあるものの、中国国内ではインターネット利用に対して制限があり、日本人学生と同じ facebook など国際的に普及している SNS を使うことはほとんどなく、中国固有の SNS がもっぱら利用されている。そこで本土の友人とのネットワークを維持するために、中国人留学生は外国にいても中国の SNS を利用している。つまり、彼らの情報交換の場は実質的に「本土」内に限られてしまうのである。

また、アルバイトの習慣も留学生に大きな影響を与えている。鈴木（2011 : 197–199）によれば、多くの留学生が長時間の就労をおこなっており、キャンパスでの勉強という留学本来の目的から離れてしまう結果、日本人学生の友人とも疎遠になり、さらに日本での留学生活に対する自己評価が低くなりがちである。またバイト先でのトラブルや差別的に扱われた経験が、中国人留学生の日本における不満や、日本に対するマイナスイメージの決定因となるという研究も少なくない[5]。

以上にみられるように、日本における留学生は増加する一方で、留学生と日本社会の間の人的ネットワークの構築は思うように進んでおらず、特に中国と中心とするアジアからの留学生は日本で友人をつくることができず、ひいては留学生活への不満を生んでいる。この現状は、日本がグローバル化を推進する上でも大きな障害となっている。従来の日本における留学生研究の多くは、対象を「留学生全体」とする傾向があった。しかし、ここでは一歩踏み込んで、その半分以上を占める中国人留学生の特徴をより正確に把握すること、特に「第三世代」の中国人留学生を日本社会における一つの文化的コミュニティとしてとらえる視点が必要ではないだろうか。そこで本論文では、現在の中国人留学生コミュニティに対象を絞り、彼らが日本社会において友人関係を構築する上で、何が問題で、どのような文化的障壁があるのか分析と考察を進めていきたい。

2. 調査の方法

日中学生の友人ネットワークと友人意識の実態を理解するために、まず日中双方の学生を対象とする半構造化インタビュー調査をおこなった。また、社会調査実習を担当されている先生の協力を得て、日本人学生に対するアンケート調査を実施できた（2014 年度春学期に日本人学生に対するアンケート調査を、秋学期は二人の中国人留学生のインタビュイーを新たに紹介して頂いた）。

2.1　インタビュー調査

2.1.1　インタビュー調査Ⅰ（中国人留学生）

まず、中国人留学生に対する調査は、2013 年の 10 月～2014 年 12 月にかけて関西圏に在学する 17 名の中国人留学生（女性 11 名、男性 6 名、平均年齢＝23.5 歳）を対象に、1 対 1 という形で実施した。対象者のうち、8 人は日本語学校の知人、3 人はアルバイト先の知人、2 人は筆者が留学している大学の知人、2 人は友人からの紹介者、2 人は社会調査実習で募集して集まった学生である（表 1）。一人あたりのインタビュー時間は約 1 時間～2 時間、場所は対象者の自宅周辺の喫茶店やレストラン、校内のカフェ、寮のロビーで行った。全員が中国人のため、中国語（北京語）でインタビューした。

2.1.2　インタビュー調査Ⅱ（日本人学生）

日本人学生に対する調査は、2014 年 10 月～11

表 1　インタビュー対象者リスト（中国人留学生）

名前	年齢	性別	出身	兄弟	滞日期間	学校属性	奨学金	学歴	専攻	所在地
A	22	女	吉林省	一人っ子	3.2 年	私立	有	大学 2 年	国際文化	滋賀県
B	27	女	山東省	一人っ子	2.8 年	私立	なし	修士 1 年	建築	京都市
C	25	女	黒竜江省	一人っ子	5 年	私立	なし	大学 3 年	法律	奈良県
D	22	女	蘇州省	一人っ子	2.8 年	私立	有	短大 2 年	観光	大阪市
E	21	男	遼寧省	一人っ子	2.1 年	国公立	有	大学 2 年	経済	大阪市
F	25	男	上海市	一人っ子	5.3 年	私立	なし	修士 1 年	経済	滋賀県
G	22	男	廣東省	一人っ子	2.8 年	私立	なし	大学 2 年	アニメ	神戸市
H	24	女	福建省	一人っ子	2.8 年	私立	なし	大学 3 年	社会福祉	京都市
I	26	女	内モンゴル	一人の兄	2.8 年	国公立	なし	修士 2 年	経済	大阪市
J	25	女	遼寧省	一人っ子	1.8 年	私立	有	修士 1 年	社会	京都市
K	21	男	江蘇省	一人っ子	3.3 年	国公立	なし	大学 3 年	経済	大阪市
L	27	男	福建省	一人っ子	8 年	私立	有	修士 2 年	環境政策	京都市
M	25	女	吉林省	一人の姉	6 年	国公立	なし	大学 3 年	日本語	茨木市
N	22	女	四川省	一人っ子	4 年	私立	なし	大学 3 年	国際文化	滋賀県
O	22	男	江蘇省	一人っ子	4 年	私立	なし	大学 3 年	機械	大阪市
V	24	女	山東省	一人っ子	0.2 年	私立	なし	修士 2 年	日本語	京都市
W	20	女	浙江省	一人っ子	0.2 年	私立	有	大学 2 年	日本語	京都市

表 2　インタビュー対象者リスト（日本人大学生）

名前	年齢	性別	出身	大学属性	学歴	専攻	大学所在地	中国人の友人数
P	19	男	兵庫県	私立	大学 1 年	英文	京都市	7
Q	22	女	大分県	国立	大学 4 年	中国語	大阪府	6
R	19	男	大阪府	国立	大学 2 年	中国語	大阪府	3
S	24	男	埼玉県	国立	大学 4 年	デンマーク語	大阪府	2
T	21	男	滋賀県	私立	大学 3 年	社会	京都市	1
U	19	女	京都府	私立	大学 1 年	英文	京都市	1

月にかけて、大阪府にある国立大学と京都にある私立大学に在学する日本人学部生 6 名（女性 2 名、男性 4 名、平均年齢＝20.7 歳）を対象として、1 対 1 という形で実施した。一人あたりのインタビュー時間は約 1 時間～2 時間、場所は対象者の学校の食堂、学校周辺の喫茶店やレストランで行った。対象者のうち、3 人は筆者の知人、3 人は友人からの紹介者である（表 2）。調査対象は日本人のため日本語でインタビューしている。

2.2　質問紙調査

一方、日本人学生の中国人留学生に対する友人意識、友人になる意欲とそれに影響する要因を理解するために、2014 年 5 月に「国際化拠点整備事業（グローバル 30）」である京都府内の国立大学と私立大学の日本人学生を対象にアンケート調査をおこなった。合計 167 名分（国立大学学生 62 名、私立大学学生 105 名分）の回答数が得られた。調査にあたっては、中国と中国人または中国人留学生に対するイメージが混同しないようにカテゴリーを明確に分けて問うこととした。

3. 日本人学生に対する質問紙調査の分析

まずは中国人留学生の友人形成の背景を理解するため、日本人学生に対する質問紙調査を行った。

調査結果からみると、日本人学生の中国に対するイメージは一般的に悪い（図 1）。良いイメージを持つ学生はわずか約 1 割である。それに影響する要因としては図 2 のように、「現代政治問題」、「中国人の性格」、「中国政治家の発言」が上位三位になる（数値が大きいほど影響が強い）。その中の二つは直接に政治に関係していて、中国に行ったことや中国人と接したことのない学生のほうが多いと想定されるため、「中国人の性格」という項目も日本のマスコミによる報道から受けたイメージが多いのではないかと推測できる。つまり、日中の悪化している政治関係が、日本人学生の中国に関するイメージに非常に大きな影響を与えている。

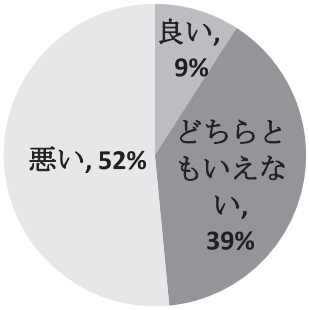


図 1　中国に対するイメージ（全体）

クロス表で検証した結果（表 3）、中国に対する悪いイメージが、日本人若者が中国人留学生と

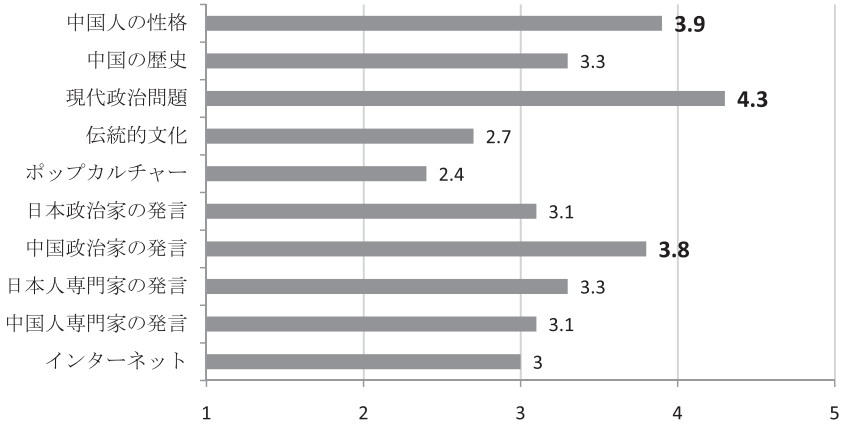


図 2　中国に対するイメージに影響する要因

表 3 「中国に対するイメージ」と「友人意欲」の関係

「中国」に対するイメージと中国人留学生と友人になる意欲のクロス表

			中国人留学生と友人になりたい			合計
			思う	どちらともいえない	思わない	
「中国」に対するイメージ	悪いとは言えない	度数	45	26	8	79
		%	57.0%	32.9%	10.1%	100.0%
	悪い	度数	29	41	15	85
		%	34.1%	48.2%	17.6%	100.0%
		度数	74	67	23	164
		%	45.1%	40.9%	14.0%	100.0%

（有効回答 164 部、カイ二乗検定の結果は 5% 水準で有意）

友人になる意欲に消極的な影響があると証明された。

また図3のように、日本人学生の約5割の人に中国人留学生の知り合いがいる。これは、日中学生間でコミュニケーションをする条件は十分そろっていることをしめしている。したがって、もし日中学生が友人関係の形成が難しい場合、それは人口的要因ではなく、社会的な要因が影響している可能性が高いと考えられる。

さらに、中国人留学生の知り合いが多いほど、友人意欲が高いという結果が得た（表4）。その理由としては、中国人留学生の知り合いが一つの情報のルートとして、豊富な情報が日本人学生に流れ、中国人に対する不信感が減って、中国人留学生と友人になる心理的な障壁が少なくなったと考えられる。

また、日本人学生にとって、中国人一般と中国人留学生という二つの集団に対するイメージに非常に大きな差があることに注目すべきである。今回の質問紙調査において、中国人一般または中国人留学生というグループに対して、いいイメージの「親切」、「協力的」、「真面目」、「穏やか」、「素直」、そして悪いイメージの「ケチ」、「乱暴」について、「強く思う」から「全く思わない」という五段階の選択肢を入れた。その結果、中国人留学生に対するイメージの全ては、中国人一般よりはるかにいい。具体的には、以下の通りである（選択肢は三段階にまとめて表示する）。

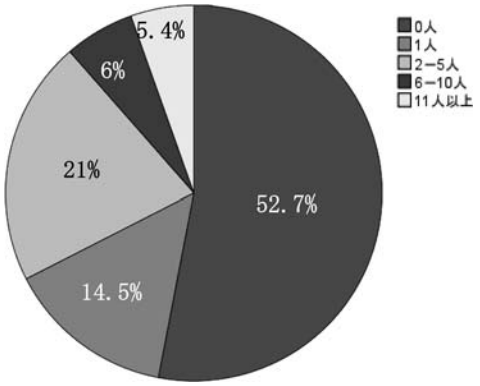


図3　中国留学生の知り合いの人数

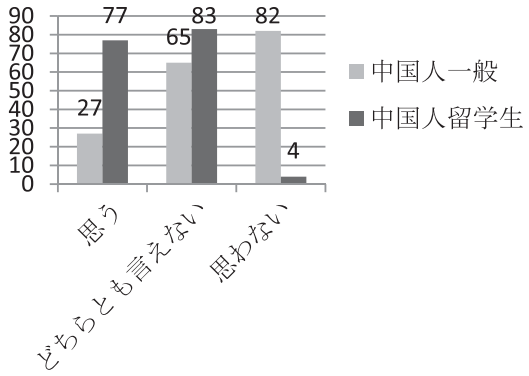


図4　「親切」に対する評価

表4　「中国留学生の知り合いの数」と「友人意欲」の関係

中国人留学生の知り合いの数と中国人留学生との友人になる意欲のクロス表						
			中国人留学生との友人になる意欲			合計
			思う	どちらともいえない	思わない	
中国人留学生との知り合いの数	0人	度数 %	28 30.4%	46 50.0%	18 19.6%	92 100.0%
	1人	度数 %	18 54.5%	14 42.4%	1 3.0%	33 100.0%
	2人以上	度数 %	30 71.4%	8 19.0%	4 9.5%	42 100.0%
	合計	度数 %	76 45.5%	68 40.7%	23 13.8%	167 100.0%

（カイ二乗検定の結果は1%水準で有意

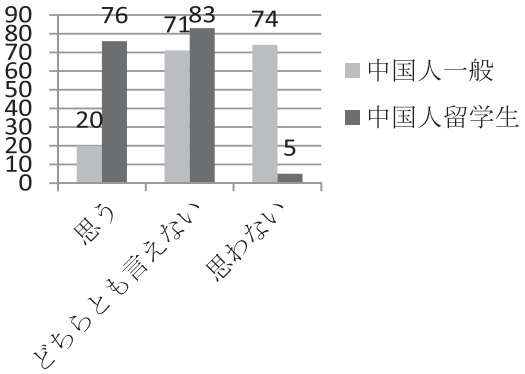


図 5 「協力的」に対する評価

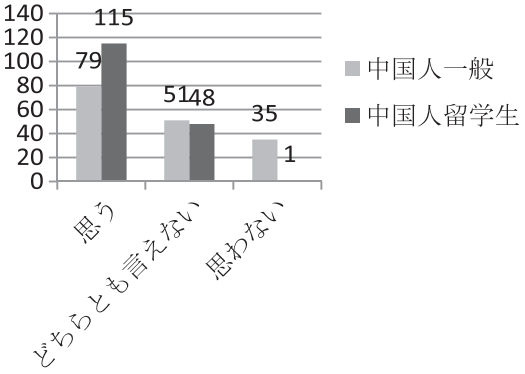


図 6 「真面目」に対する評価

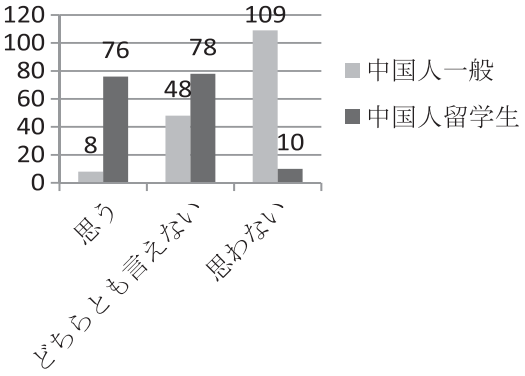


図 7 「穏やか」に対する評価

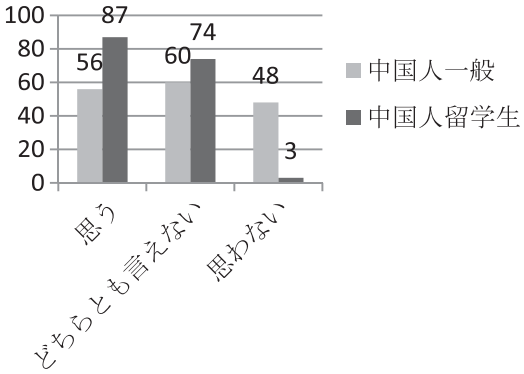


図 8 「素直」に対する評価

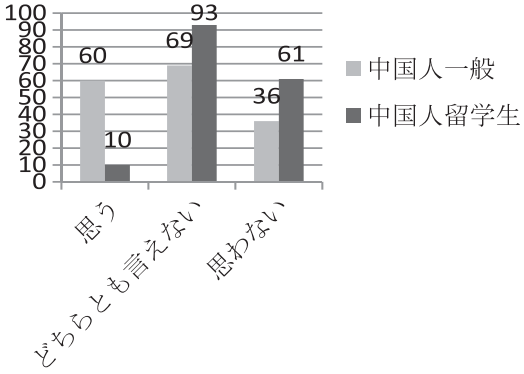


図 9 「ケチ」に対する評価

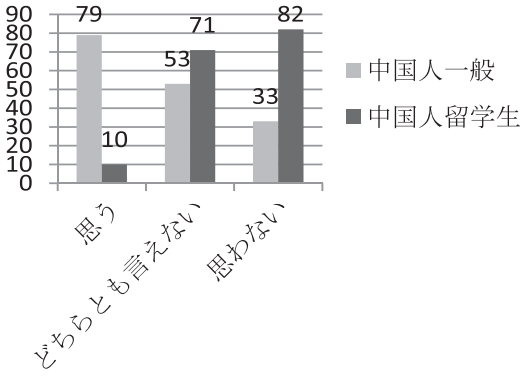


図 10 「乱暴」に対する評価

日本人学生が中国人留学生に対してよりポジティブなイメージを持っていることは、日本に来た留学生が日本という国や日本文化が好きで、お互いにライバルではなく友好的な関係に近いからだろうと思われる。

また、日本人学生のグローバル志向と中国人留学生の知り合いの数の関係を検証した。グローバル志向はかなり曖昧な要素であるため、日本人学生の英語力がグローバル志向の一つ重要な指標として使われている。その結果、日本人学生の英語

表 5 「日本人学生のグローバル志向」と「友人意欲」の関係

日本人学生の英語力と中国人留学生との友人知り合いの数クロス表						
			中国人留学生の知り合いの数			合計
			0 人	1 人	2 人以上	
日本人学生の英語力	全くできない	度数	11	3	2	16
		%	68.8%	18.8%	12.5%	100.0%
	簡単な会話	度数	78	27	27	132
		%	59.1%	20.5%	20.5%	100.0%
	流暢	度数	3	3	12	18
		%	16.7%	16.7%	66.7%	100.0%
合計		度数	92	33	41	166
		%	55.4%	19.9%	24.7%	100.0%

（有効回答 166 部、カイ二乗検定の結果は 1% 水準で有意）

力が高いほど、中国人留学生の知り合いがより多いということが分かった（表 5）。

その具体的な理由として、いくつか考えられる。一つ目は、英語力の高い学生のほうが、より異文化コミュニケーション能力も持っている。二つ目は、「グローバル志向」の高い日本人学生が、より積極的に外国人留学生と付き合おうと思う。三つ目は、異文化コミュニケーションのできる学生のほうが異集団に対する寛容度がより高い。四つ目は、英語力が高いことによって、海外からの情報収集もできるため、日本国内での単一の情報源だけではなく、グローバルな視野で日中関係、そして日中間の異文化交流を見て考えることができる。この分析によって、グローバル志向が高い日本人学生が、同じくグローバル人材を目指す中国人留学生と付き合う機会が多いと理解できるだろう。

全体的にいうと、日本人学生の中国人留学生と友人になる意欲は、中国に対するイメージ、周りの中国人留学生の知り合いの数と関係する。その中で、中国に対するイメージが、日中の政治的背景に影響されていると考えられ、中国人留学生と知り合う機会が日本人学生のグローバル志向に関係すると考えられる。つまり、日本人学生の中国人留学生と友人になる意欲が、彼らの政治的背景、身近な経験、グローバルな背景と関係するともいえるであろう（図 11）。

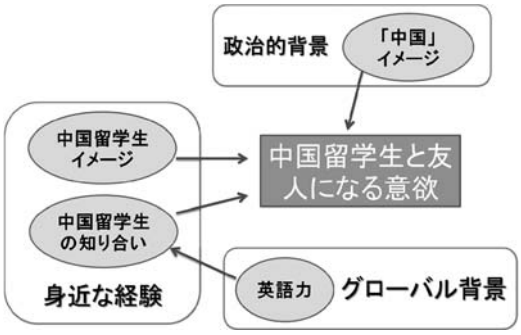


図 11　友人意欲に関連する要因

また調査によって、中国人留学生の知り合いのいる人の方が中国、中国人一般、中国人留学生に対するイメージ全てにより良い評価をつけている。それは日本人学生がマスメディア以外の身近な経験という情報のルーツから、中国に関する情報が豊富になるため、より客観的な判断ができるからだと考える。したがって、どうやってマスコミという単一の情報源から解放され、その影響をできるだけ抑えるかが、日中若者の相互理解とコミュニケーションに大きな意味がある。その上でこの結果は、日本にいる中国人留学生の友人ネットワークの重要性をもう一度証明したものであると思う。直接的なコミュニケーションを通して、

日中の若者がお互いに対して偏見を抑え、より良い印象を持つようになり、信頼関係をつくることができるからである。

4. 日中学生に対するインタビュー調査の分析

中国人留学生が日本人と友人関係を形成する上で、具体的にどのような問題を抱えているのか、特に日本人の友人ができない留学生の不満の原因をより詳しく知るために、インタビュー内容の分析を行った。

4.1　友人と出会い交流する機会の少なさ

4.1.1　アルバイトのためキャンパスから遠のく

今回の調査結果をみる限り、中国人留学生は昔より経済的な余裕があるものの、アルバイトに熱心だという特徴は続いている。そのためにプライベートな時間が少なく、サークルなどの学校活動への参加にも消極的な傾向がみられる。その原因を尋ねると、以下の回答があった。

C さん（中国）：留学生にとっては、バイトは授業のような存在だ。時には授業よりも重要だ。留学生が直面しているのは現実だ。留学生はいつも来年の学費を心配している。今月は頑張らないと、来月はホームレスになるという危機感が物凄く強い……

N さん（中国）：日本人の友達が見つからない。スケジュール違うから。授業が終わってすぐアルバイトに出なきゃ、彼ら（日本人学生）はサークルとかに参加するけど、私たちにそんな余裕はないから。

また、調査対象の留学生たちは学校以外の時間のほとんどはアルバイトで占められていて、三点一線式の生活を暮らしている。そのために彼らの学内における社交の展開が難しくなり、大学の留学生サービスの利用にも消極的になっていると考えられる。

4.1.2　専攻による友人形成の違い

専攻によって友人関係を形成するきっかけが違うことにも注目すべきだと思う。インタビューから、たとえば B さんはデザイン専攻でよく日本人学生と一緒に展示会の準備をしたりすることでクラスメートと仲良くできた。D さんは観光専攻なので、よくクラスメートと一緒に旅行に行ったりしている。G さんは芸術系のアニメ専攻で勉強していて、チームワークでアニメ作品を作ったりすることでいっぱい日本人の若者の友達ができた。L さんは福祉系（環境政策）であり、よくボランティア活動に参加してグループ活動をすることが多いため、日本人との触れ合いが増え、友達をたくさんつくったという。それで、共通の話題も多くなる。

協力関係と場の共有があるということは、日本人と仲間になる鍵である（中根 1967）。逆にいえば、そのことは日本の大学全体にいかにコミュニケーションの場が少ないかをあらわしている。日本社会の単一性や構造的な制限は昔とそれほど変わらないことも示している。

4.1.3　アルコール文化への抵抗感

中国人の学生の中でアルコール文化はそんなに一般的ではない。それはある程度、彼らがアルコールに関係するパーティや食事会などに関心が低いことにつながる。

W さん（中国）：寮生の中で、欧米の人が授業以外でよくパーティに参加したりするけど、私はあんまり好きじゃない、バーとかに行くことにはやっぱり抵抗感があるし、行きたくない。あそこの環境は騒がしいイメージだ。（バーに行ったことがあります？）ない。

インタビュイーの中には、自分の人脈を広げるために、積極的にネットワーキングをしている人もいる。インタビュー当日の夜、K さんはわざわざ大阪から京都に行って、参加費 2300 円の学生交流パーティに参加するところであった。しかし、多くの留学生は、そのようなパーティに参加する経済的または時間的な余裕がないようである。

それとは反対に、日本の食事会は例えばゼミやサークル、同窓会などの「枠」で分けられ、いわば参加資格が必要である。この前提からすると、そこで新しい友達ができる可能性は実際にはゼロである。日本人の集団の「タテ社会」的特徴が、ネットワークの機能を弱くさせることを示している（中根 1967）。

以上に述べたように、同じ学校という「物理的な空間」に属しても、中国人留学生と日本人学生の出会える「社会的な空間」きっかけが実は非常に少なく、それが多くの留学生が日本での異文化コミュニケーションに不満を感じる原因になっていると考えられる。

4.2　異文化コミュニケーションの障壁

4.2.1　日中の友人づくりの違い

（1）中国人留学生は、日本人から集団意識または距離感を強く感じている。それが当初の積極的に日本人の友達を作ろうという留学生の姿勢を保守的に転じさせてしまう。

A さん（中国）：最初は積極的に日本人の友達をつくろうとしてみたが、現実は中国人同士のように短時間で打ち解けることが難しい……

B さん（中国）：日本人と付き合う時は何か束縛されたような感じがして、どういうふうにコミュニケーションをとればいいのか分からなくなっちゃった。

C さん（中国）：こっちから一方的に感情を込めて、向こうは全然返事こなかったら、がっかりするし、友達にならないわ……

L さん（中国）：（日本人学生が）入学してすぐ自分の仲間グループをつくって、もしそういうグループができたてしまったら、外の人が入るのがすごく難しい。

M さん（中国）：距離を感じる。彼ら（日本人学生）は絶対に先に声をかけてくれないの。こっちから声をかけても、相手が“なんで私に？”みたいな表情で。けど、こっちから積極的に声をかけるのがどれくらい勇気がいるのか知っている？！初めてなのに、挫折。

W さん（中国）：日本人と友達になるのがすっごいしんどい。文化の違いが大きい。相手が言ってることは本当かどうか分からない。いったいどういう意味か推察しなきゃ。

以上のことで、調査対象の中で日本人との人間関係に不快感や失望感をもっている人が多く存在することが分かった。「ヨソ者」として扱われ、差別されていなくてもその距離感を感じているからである。その温度差から、自分が歓迎されていないように感じてしまい、誤解が生じる可能性が大きいと考えられる。

他方、日本人とうまくいっているインタビュイーにその秘訣を尋ねると、以下のような回答を得た。

D さん（中国）：「自己中じゃない人（が日本人とうまく付き合える）。集団行動が好きな人。個性的な人は好まれない。」

E さん（中国）：日本人と友達になる前提は、日本人のように見えることだね。同じ格好とか。日本人という民族はもともと排他的だった

から、積極的に話しかけられるわけがない。日本人の若者は主に外見で人を判断する。外見が一緒だったら外国人ということは問題じゃない。

L さん（中国）：皆と同じ行動を取ること。自分の個性を隠して、中国的なものをできるだけ浅くして……食事の注文も同じ、皆と一緒だったらいい。彼ら（日本人）は顔を出す（目立つ）人が好きじゃないから、他人に迷惑をかけないように。

つまり、彼らは日本での生活経験から日本人が「同質性」や「同調行動」を好むことを発見し、進んで同調したのである。しかし、そのことを理解していても、日本人に合わせて行動することにやはり抵抗を感じる留学生も少なくない。

では、なぜ中国人と日本人が友人となる場合には、こんなに違和感があるのか。そこで筆者が考えたのは、日本人と中国人が友人選択における注目点の違いにある（図 12）。中根（1978）によれば、中国人は個人の独立性や多様性を求めるのに対して、日本人は集団や同質性にこだわる。それは中国が多文化社会であるために多様な情報交換のチャンネルが必要なのに対して、日本は単一社会で安定性があるのでその必要がない。

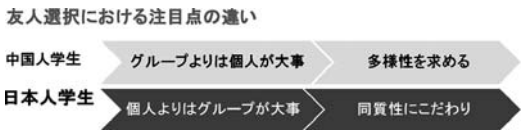


図 12　友人選択の違い

（2）日本人のインタビュイーも、日本人の集団意識の強さを認めている。その原因はいくつかあげられる。

①　日本の学校で受けた集団行動の教育（国民教育による）

P さん（日本）：日本人には、（集団意識が）ある。それは日本の小中高とかの教育に関係してると思う。アメリカとかでやっぱり TOFEL の試験みたいに、プレゼンテーションとかもそうだけど、自分の意見を自分なりに述べる機会はいっぱいあるけど、日本はまったくないから、その自分をもつ機会っていうのが少ないと思う。

Q さん（日本）：（日本人の集団意識は）強いと思います。まず小中学校で、集団行動をずっと習うからです。いろんなことを一緒にやって、ルールを守らない人は怒られるし。あとは、やっぱりよその国のことを知らなすぎるかな。外国人を知る機会があんまりないから、慣れてないと思います。日本人のことしか考えてないというのはよくない。

②　コミュニティ単位で行動する習慣（集団主義）

P さん（日本）：（それぞれの）グループのイメージがある。個人個人っていうイメージが本当にない。日本は絶対に皆何人かで行動する。例えばご飯を食べに行く時も。

Q さん（日本）：個人でいたら、コミュニティにいることが好きなので、サークルとか、どっかのコミュニティに入っていたいというのがあります。同じチームとかじゃなかったら、仲良くなるきっかけはないかな。やっぱり同じ仕事をしたり、目標に向かってやったりすると仲良くなりますね。

③　時間が大事

P さん（日本）：日本では仲良くなるには、やっぱり時間が大事だと思う。授業が毎日一緒とかで仲良くなっていくのが多いから。

先に、中国人留学生はアルバイトで忙しいという原因から、学校活動への参加に支障となるとい

う分析をした。しかし、たとえ留学生はサークルに入っていても、日本人学生の友人ができるとは限らない。阿部によれば、サークルでは先輩後輩の関係がタコツボ化されている。「日本語が話せない留学生が大学のサークルの一員として受け入れられることは稀である。たとえ日本語がしゃべれても相互理解の友情は難しい。外国人は所詮内なる一員とはなれないからである」（2004 : 308–309）。つまり、日本人のコミュニティに入るのは難しいし、コミュニティに入ってもよそ者扱いを免れるかどうかは分からない。

（3）日中の初対面の人に対する友人意識の違い

中国に留学した経験のある日本人のインタビューイーの話から、中国人と日本人の友人作りに対する感覚の差がかなりあることがわかった。日本人の Q さんが、彼女と初対面の中国人学生と付き合うときにカルチャーショックを感じたことについて、次のように述べた。

Q さん（日本）：日本人は最初はすごく探り合って、この人友達なれるかなどうかな、いろいろ考えるんですけど、中国人は先に友達になって、遊びに行っているうちに、仲良くなればいいみたいな。

（中国に留学する時）はじめて知り合った人に、初日に「今日海に行こう」って、日本人だったら絶対ありえないのでびっくりしました．．．もし日本人同士だと、一緒に遊びに行ったり気軽にしない。なんでしょうね、なんかクラスメートだったら、毎日あってるうちに仲よくなって、心をゆるして、なんか一緒に遊びにいったりしたけど、いろんな人に声をかける人はあんまりいないかな。中国人って初対面なんだけどすごく仲良くなって、そこからすっごいご飯いこうとか、遊びに行こうとか、どんどん誘ってくれて、たぶん日本人だったら気にしちゃって、むこうが嫌がらないかというのを気にしすぎて誘えないけれども、どんどん誘ってくれて、なんか嬉しかった。

Q さんの話から、日本人と中国人で初対面の人に対する友人意識が違うことがよく分かると思う。山岸の理論にしたがえば、中国では社会的不確実性が大きいため、日本人より一般的な信頼関係を求めている。日本人のように時間をかけてコミットメント関係を形成すべく努力するのではなくて、最初からいろいろな人と積極的に付き合ってみて、効率的な友人形成を求めている。その友人意識が生じる理由は、中根の理論で説明したようがよく分かる。

中根によれば、「中国人にとっては、実際にしらない人々の中につねに『見えないネットワーク』によって結ばれている人々がいる。知らないからといって日本人のように、『ヨソ者』とは限らないのである」（中根 1967）。

つまり、中国人はなんらかの機縁で知り合った人に日本人ほど警戒心をもっていないといえる。この「警戒心」は広い意味で使われている。相手が自分を騙したりすることではなく、相手が自分のことに関してどう思うかということである。それがどれぐらい気になるかどうかによって、相手との付き合い方がだいぶん変わってくる。逆に、中国人の場合は、相手から警戒心をもって付き合われることに違和感を感じる。中国人留学生が日本に来る場合、「客」としてまたは「滞在者」として日本人と触れ合うので、初対面の付き合いかたが自分の期待値と大きくずれると、「相手が自分に興味をもってくれない」「日本人は冷たい」とか、さらに「相手が嫌中だから積極的に付き合ってくれない」と思い込む可能性が十字分ある。

ところが、日本人のインタビュイーは中国人留

学生にも集団意識を感じている。そして、集団意識をもっているのは日本人だけではないと主張している。

T さん（日本）：外国人は外国人のコミュニティを作ってるっていうこともある。日本人から見たら（友人になるのに）すごく邪魔してるというのがあるかもしれへん。
Q さん（日本）：（中国人同士は）すごく仲がいいと思います。すっごく結束力が強いというか、なんか全部協力し合ってるみたいな。中国人同士で固まってるのとかを見ると、一緒に仲良くできたらいいなと思うんですけど。
R さん（日本）：中国人留学生だけじゃなくて、アジア人って群れる。韓国人も日本人も。固まってるんだな。

4.2.2　日本語能力の不足

日中の若者間でコミュニケーションをする場合、ネイティブスピーカーである日本人学生に対して、特に入学間もない頃、中国人留学生からコミュニケーションをはかることはむずかしい。「会話のニュアンスが理解できない」という悩みがよくあり、「人の話が分からない時は分からないままでいい、無視すればよい」という消極的な意見もあった。しかし、留学生にとってのジレンマは、日本人の友達が少ないほど、自分の日本語の上達が難しくなるということである。

B さん（中国）：（日本人と友達になるうえで、一番大きな障壁は何か？）言葉だね。日本人の若者のようにチャットして盛り上がるのがなかなかできない

ところが、日本人学生が留学生の日本語のレベルに対する要求は思ったより厳しい（図 13）。

P さん（中国）：やっぱりある程度コミュニケーションができる人じゃないと自分からは喋りにいこうとしない。初めて出会った時、ちゃんとコミュニケーションができないなら、やっぱり、まだ無理だと思う。やっぱその人は日本に来てるけど、もっと日本語を勉強してくるべきだったかなあと思う。話題があるというのも大事、趣味が一緒というのも大事だけど。例えば「一緒にテニスしにいこうよ」みたいな感じで、何かの映画が好きとか、そういう会話ができるレベルじゃないと、友達になるのはまだむずかしいと思う。

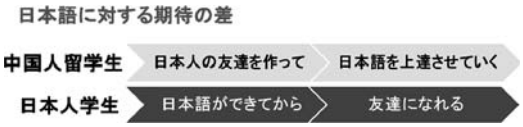


図 13　日本語と友人形成

日本人学生が外国人友達と話す時の話題の多くは、日本人と話す時の話題とあまり変わらないようである。それは留学生に、日本人同士のように自然な日本語で雑談できるレベルの日本語能力が求められ、留学生にとっては大きなチャレンジである。

4.2.3　日本人が欧米に憧れる感情への違和感

中国人留学生には、日本人の欧米に憧れる感情に対して違和感を感じる人もいる。

D さん（中国）：……国籍にも関係あると思う。日本人は欧米の人にもっと興味をもっている。（欧米の人は）そのままでもいいし、日本人らしくなったらまた嬉しく感じるみたい。でもアジア人に対してはもっと日本人らしくしてほしいようだ。期待の温度差がある。
V さん（中国）：欧米の人が日本でもっと人気があると思う。あるクラスメートはロシア人の留学生と一緒に登山の交流活動に参加して、多

くの日本人はロシア人の周りに寄り添って喋ってばっかりで。本当に欧米に憧れてるんだなって。

日本人のインタビュイーの全員が、日本人の友人作りにおける「欧米志向」を認める。それは日本人にとって当たり前なことという感覚に対して、筆者は驚いた。それは日本の近代史の「脱亜入欧」[6]の文化と日本人の「異文化」に対する理解に深く関係している。その背景をちゃんと分かっていても、客観的にアジア系の外国人の日本人おける友人作りにマイナスの影響をしているという残念なことになる。特に日中韓の複雑な関係の中で、若者間のせっかくのコミュニケーションのチャンスが失われている。

P さん（日本）：（温度差）それはあると思う。やっぱ英語かな。ネイティブかどうかは大事だと思う。あと見た目もあると思う。やっぱり人間として違うから、興味が出るのは普通だと思う。中国人は別に日本人とそんなに変わらないし。珍しいものが好きというか、そんな感じだと思う。

Q さん（日本）：ぜったいそういうのはあると思います。アジア人の人は自分と似てるから、外国人っていう意識がもしかしたら薄いのかもしれない。日本人は外国人に慣れてないと思いますね。島国だから。欧米の人と付き合ったほうが外国人と話してるっていう感覚があるし、あとはきっと欧米への憧れとかも前はあったと思う。

R さん（日本）：それやっぱり文化があまりにも近すぎて、例えば日本人は中国人に自分と同じような文化をもっているって期待しちゃうんじゃないですか、例えばアメリカ人は家で靴を脱ぐ文化がないじゃないですか、だから日本の家に入る時に、靴を適当に散らかして入っても、日本人の人は多分なんやねんあのアメリカ人って思わないんじゃないですか。中国人とか韓国人がそういうことをやったら、日本人は礼儀のない奴や、っていうふうに感じるんじゃないですか。あんまり文化が近いから、逆に近い所にいすぎて、相手に期待しすぎるところがあるんじゃないですか。

これからも、アジア系の留学生の増加は見込めるが、一部の日本人のこのような外国人に対する温度差が、その異文化コミュニケーションに消極的な影響を与え、アジア系外国人が差別されたと感じて摩擦が生じることも十分ありうると考える。

4.2.4　ジェンダーによる差

「共通の話題」が少ないというのは、中国人留学生が日本人と友達になる上でよくある悩みである。「話題が見つからず、つまらなくて疲れた」との意見もあった。この問題に関しては、男女の差がみられる。男性同士の方が共通の話題を見つけやすい傾向があって、友人関係の形成に積極的かつ効率的である。きっかけとしては、男性は大学入学時の健康診断などの機会によく日本人男性の友達ができたりするようだが、女性にはそういうケースは全くないという差異が顕著である。インタビューの結果によれば、男子同士の興味はよく一致して、ゲーム、スポーツ、アニメや漫画に集中する。他方、女性間の話題は、趣味が多様なので、共通の話題が見つけにくく、プライバシーに関わることも多いため、話題が展開しにくいようである（図 14）。

男女の友人作りに差があるということに関して、日本人の学生がより明らかな認識をもっている。日本人全体で集団意識がより強い中で、女性のグループに対するこだわりがいっそう集団意識

図 14　男女学生の話題の違い

を強くする。その上「外見」という序列の差が出てきて、外国人（特にアジア人）の留学生の友人作りにさらに困難をもたらしている。

P さん（日本）：「アジアと欧米では違う気がする。欧米は本当に男女が同じって感じがする。男も女もわいわいしてる感じ、アジアの人だったら男女では結構差があると思う。女の人の方がやっぱり大人しい感じがある。自分から声をかけにいかないっていう人が多いなと思う。日本の男の人は絶対に喋りかけにくる。始めましてとか、仲良くなるために。」

Q さん（日本）：女性のほうがグループを作ると思います。その数人で行動するみたい。日本人の女の子は結構見た目も気にしてると思います。髪形の感じとか、顔がどのぐらいかわいいかとか、多いと思いますね。（すっぴんとかは関係ある？）女の子は気にする人もいると思います。（U さんも同様な話をしている。）

4.2.5　情報環境の影響

（1）マスコミの影響

中国に関する情報を得る中で、日本のマスコミ報道の偏りと、それを日本人の若者が鵜呑みにすることを心配する人も少なくない。国レベルの仲が悪いことで、日本のマスコミの中国に関する報道も厳しくなっている。それについて、日本人学生の考えを聞いた。

P さん（日本）：（中国や中国人に関する情報はどこからもらう？）テレビ、ニュース、マスコミ。中国について政治的に仲悪いせいか、中国の悪いこと、韓国の悪いことのほうが、日本でニュース流れてることが多い。やっぱりいいことも絶対いっぱいあるじゃんか、同じぐらいあると思うけど、悪いことの方が流れてることが多いから、それはやっぱり政治的な仲のせいだと思う。国全体が、あんまり中国や韓国に対するイメージがないのに、そういうのがあるんだったら、それは絶対報道のせいだと思う。欧米に関する報道はいい報道が多い。

（そういう報道は日本人が中国人に対するイメージに影響すると思う？）

P さん（日本）：人によると思う。ちゃんと分かってる人と分かってない人、本当に何も知らなくて、そのニュースとかテレビでやってることを鵜呑みにする人は、やっぱ嫌韓、嫌中だったりとか、先入観をもってしまうと思う。

Q さん（日本）：影響してると思います。中国人の友達がいなかったら、知るのがそこしかないので。

R さん（日本）：批判的能力がなかったら鵜呑みにしちゃったりするんじゃないんですか。あ

と今、日本のテレビは取り合えず中国を攻撃しといたほうが得になるっていうか、視聴率が上がりやすいんで、だからそういう番組が多いじゃないんですか。で、そういう番組をそのまま鵜呑みにしちゃうんじゃないんですか。

日本のマスコミの視聴者は日本人だけではなく、多くの日本に滞在する外国人も見ている。自分の母国に関する悪いニュースが多く、度々非難されると、それが日本社会にあたえる悪影響を想像してしまい、彼らが日常生活の中で日本人に触れ合うときの精神的負担になる。また、そのことを気にしなくても、そのようなニュースが社会中で話題になって、バイト先でお客さんに聞かれるパターンがよくある。その場合は、サービス提供者としての立場にある留学生が、対応せざるをえない状況におかれてしまうのは間違いない。

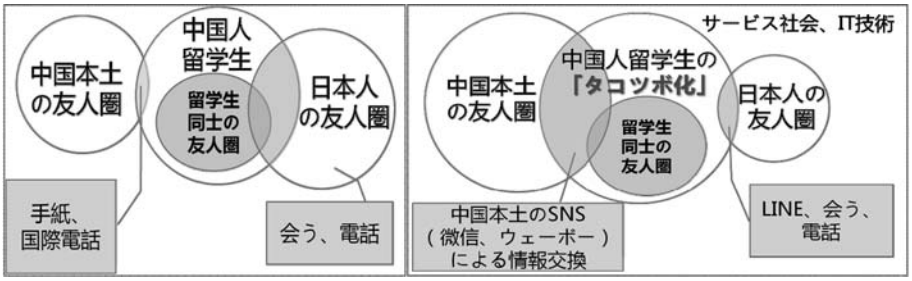
(2) ソーシャルメディアの役割

SNS の利用実態を見ると、中国人の社交圏と日本人をメインとした社交圏に分かれている。中国人は留学生同士または本土の友達との付き合いに精一杯で、心理的に日本社会に溶け込みにくくなる傾向がみられる。その社会的背景としては、サービス化社会と IT 技術の発達によって、生活面でまわりの人に頼らずに済むからである。かつての留学生であれば日本人学生との付き合いの中でいろいろな情報収集をせざるを得ず、付き合いながらお互いに理解しあうこともできた。今の日中学生は、その情報交換によるコミュニケーションのきっかけを失っている点に注目すべきだと思う。(図 15)

一方、日本人学生はみんな LINE で連絡を取っている。それに対して、中国人留学生が本土の SNS ばかり利用すると、SNS を活用して日本人と友人になって、異文化コミュニケーションを取るチャンスを失うかもしれない。

5. 結論

今回の研究において、日本人学生に対する質問紙調査と日中学生に対するインタビュー調査を通じて、中国人留学生の日本人との友人形成や異文化コミュニケーションに対する阻害要因をある程度把握できた。主に二つの側面に問題がある。一つ目は、日中学生間の友人形成に必要な出会いのきっかけの不足である。二つ目は、異文化コミュニケーションを妨げるいくつかの要因である。具体的にいうと、日中学生間の友人形成には、日中両国の政治関係、個人レベルの触れ合い、コミュニケーションの場（学校、バイト、専攻）、経済的格差、社会のしくみに基づく社交習慣（友人作りの違い、集団意識の違い）、語学力、異文化に対する理解、ジェンダー、情報環境（マスコミ、ソーシャルメディア）に関係する。その上、中国人留学生の独特な社交背景としては、彼らの中国



昔の中国人留学生の友人圏　　現在の中国人留学生の友人圏

図 15　昔と今の在日中国人留学生の社交圏の対比

本土の SNS を多用する習慣が、彼らの異文化コミュニケーションにマイナスの影響をあたえていることも考えられる。

異文化集団間の友人形成は、複雑な社会的要因に影響されている。友人形成の成否は、異文化交流の効率につながり、留学生のホスト社会への適応に強く影響する。それを理解する上で、日中学生間の友人形成は、日中若者が日中の複雑な政治的・文化的背景の中で、共通性を見つけて、信頼関係を築く「はかり」だともいえるだろう。そういう意味では、日中若者の友人形成の研究は、意義重大である。一方、グローバリゼーションの進行の中、国籍枠で日中若者の特徴を把握することが難しくなってきている。そのため、彼らのパーソナルネットワークに対する分析がこれからの日中若者間の友人形成の実態を理解するには一層必要だと思う。

今回のインタビュー調査は中国人 17 人、日本人 6 人の対象者にとどまり安易に一般化できないが、中国人留学生にとって日本で「異文化体験」をすることが最大の目的という「こだわり」があればこそ、日本人学生との些細なディスコミュニケーションが大きな問題になるのである。そこに、欧米の大学とは異なる中国人留学生の問題がある。

今後も日本社会において中国人留学生が増えていく可能性が大きいため、中国人留学生の特徴を把握し、彼らの留学欲求を理解することが、日本側の留学政策の実施、多様化社会の進行に対して重要な意味があると考えられる。他方、中国人留学生のネットワークの特徴を理解することは、日本に留学する外国人に基づく人的ネットワークづくりを効率的に展開することに役に立つと思う。これからの研究は、それらの要因の機能をより詳しく分析し、そして理論的な説明を含めて理解していきたい。

〔注〕

1）8 つの選択肢への内訳は以下のとおり。「日本語が使える」44.5%、「専門知識を生かせる」8.5%、「日本は住みやすい」8.5%、「日本が好き」7.9%、「ビジネスチャンスがある」7.9%、「母国での就職に有利」7.3%、「その他」7.3%、「日本に知人友人がいる」3%

2）「日本人に対する印象が良くなった」とする回答については、平成 17 年は 58.9%、平成 19 年は 59.6%、平成 21 年は 60.3%、平成 23 年は 66.1% と上昇していた。

3）「内なる国際化」とは、外国人をよそ者として扱わず、日本国内で異なった文化を暖かく受け入れること（阿部 2004 : 303）

4）「一人っ子政策」施行（1979 年）の後に出生した者のこと（坪谷 2008 : 8）

5）孫長虹，2004,「中国人留学生の日本観」『多元文化』4，名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻編；pp.217–230.

6）「脱亜入欧」とは、明治時代以降の日本が「後進世界」であるアジアを抜け出し欧州「列強」の一員に入ろうとする思想や政策のこと。小柳志津，2006,『感情心理学からの文化接触研究―在豪日本人留学生と在日アジア系留学生との面接から』風間書房；pp.153.

文　献

阿部清司，2004『大学と日本の国際化－知的国際貢献の試み』ジアース教育新社.

Gracia. Liu-Farrer, 2009,“Educationally Channeled International Labor Mobility : Contemporary Student Migration from China to Japan” *International Migration Review,* 43（1）. 178–204.

広田康生，2003,『エスニシティと都市〔新版〕』有信堂.

Hall, E. T. : Beyond Culture, *Doubleday,* 1976.（岩田慶治，谷泰訳：文化を超えて，TBS ブリタニカ 1979）

平松闊＆鵜飼孝造＆宮垣元＆星敦士，2010,『社会ネットワークのリサーチ・メソッド－「つながり」を調査する』，ミネルヴァ書房.

井上俊他，1996,『時間と空間の社会学』岩波書店.

加賀美常美代，1996,「日本人ホスト側から見た外国人学生のトラブル事例」『日本語と日本語教育』24, 133–152.
小島晋治　他（編集），1989,『岩波講座　現代中国〈4〉歴史と近代化』岩波書店.
毛里和子（編集），2001,『現代中国の構造変動〈7〉中華世界－アイデンティティの再編』東京大学出版会.
中根千枝，1967,『タテ社会の人間関係－単一社会の理論』講談社.
中根千枝，1978,『タテ社会の力学』講談社.
大橋敏子，2008,『外国人留学生のメンタルヘルスと危機介入』京都大学学術出版会.
園田茂人（編集），2008,『中国社会はどこへ行くか－中国人社会学者の発言』岩波書店.
鈴木洋子，2011,『外国人留学生と留学生教育』春風社.
中文導報（編集），2000,『隣の中国人』双葉社.
坪谷美欧子，2008,『「永続的ソジョナー」中国人のアイデンティティ－中国からの日本留学にみる国際移民システム』有信堂.
寺倉憲一，2009,「留学生受入れの意義－諸外国の政策の動向と我が国への示唆」『レファレンス』59(3)，国立国会図書館調査及び立法考査局，51–72.
ウェルマン・B（野沢慎司・大岡栄美訳），2006,「コミュニティ問題－イースト・ヨーク住民の親密なネットワーク」野沢慎司監訳『リーディングスネットワーク論－家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房.
山岸俊男，1999,『安心社会から信頼社会へ－日本型システムの行方』中公新書.